様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５９０２１７

研究課題名（和文）東日本大震災被災地における学校コーチングモデルの構築と実践プログラム開発

研究課題名（英文）The development of school coaching model and a practical program in survivors of the great east Japanese earthquake

研究代表者
北村　勝朗（KITAMURA, KATSURO）

東北大学・大学院教育情報学研究部・教授

研究者番号：５０１９５２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：学校教育における支援的なかかわりとしてのコーチングは，児童生徒の自律的な行動を導く日常的なかかわり行動として，特に東日本大震災を間近で体験した児童生徒への心理的なケアにおいてその重要性が報告されている。本申請研究では，コーチングの日常性及び自律性支援作用に着目する。そして，①児童生徒の自律的行動を導く作用としてのコーチングの特性の解明とモデル化，及び②学校教育現場に利用可能なコーチング・プログラムの開発・評価とプロトタイプの提案を行う。

研究成果の概要（英文）：The growing attention to coaching as a heart care suggests that the psychological support for disaster victims in the wake of the great east Japanese earthquake.
The purpose of this study was to construct a school coaching model and to develop a practical program in survivors of the great east Japanese earthquake.

研究分野：教育学

キーワード：学校コーチング　東日本大震災　教師　実践的指導力

１．研究開始当初の背景

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、学校教育に求められる役割や内容が変化している（中教審答申、2012）。そのため、教育のスタイルを変えていくことが不可欠であり、新たな教育方法が開発されることが必要とされている（中教審答申、2012）。中でも、いじめや不登校など、生徒指導上の諸課題へ適切に対応できる実践的な指導力を身につけることが急務とされているため、理論に裏付けられた高度かつ効果的な教育実践の研究は最近特に注目されている。しかし、時間的な余裕がない学校生活の中で、専門家にゆだねるカウンセリングによってではなく、いかにして教師自身が日常的なかかわりを通して児童生徒のこころのケアをしていくかは、切実な問題となっている。特に東日本大震災の被災地の学校では、日々の生活の中で心理的なケアが必要とされる児童生徒が多数存在している。こうした状況の中で、相手を承認し、傾聴し、問いかけることで、相手の自律的な行動を導くコーチングによるかかわりは、その短期的問題解決性、相互作用性、日常性、支援性という点で、非常に有効なものと考えられる。

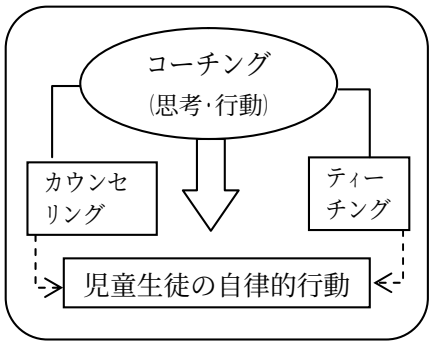
研究代表者（北村）は、関連する先行研究においてスポーツ、音楽、科学領域のエキスパートコーチの指導実践を取り上げ、コーチング・メンタルモデルを構築し、その汎用化に取り組んできた（例えば、北村、2005、2006、2009）。同時に、各県市教育委員会の指名を受け、各種教員研修講師としてコーチング研修の実践を重ねる中で、学校教育におけるコーチングの体系化・理論化に向けた取り組みが高く評価され、「日々の教育実践の中で実践力を身につけていく」学校コーチングとして研修カリキュラムの中に位置づけられ始めている。学校コーチング研究は、学術的な波及効果、貢献度の高さと社会的意義の高さが大いに期待されるものである。

２．研究の目的

本申請課題では、カウンセリングよりもより問題解決志向的で、知識技能を伝えるティーチングよりもより支援的なかかわりであるコーチングに注目する。学校教育現場でのコーチング実践の詳細な分析を通して、優れたコーチング実践における思考・行動特性を実践的指導力としてモデル化し、そうした指導力を育成する学校コーチングプログラムを開発することを目的とする。

３．研究の方法

まず、学校教育現場におけるコーチング実践について、関連書籍・文献を整理して理論的に精緻すると同時に、教科指導、生活指導、委員会活動、学級活動におけるコーチング実践の調査を実施する。調査に先立ち、予備調査を行い、コーチングの実態を捉えるための作業モデルを作成する。次にそうした研究成果に基づき、コーチングによる児童生徒および教師の体験を縦断的に調査する。その上で、これらの研究成果に基づき、学校コーチングモデルを構築し、教師のコーチング実践力育成のためのプログラムを開発する。開発されたプログラムは、パイロットスタディとして実践することを通して、その有効性・妥当性を検証し、学校コーチングのプロトタイプとして提言にまとめて発信する。



教師の実践的指導力

４．研究成果

学校教育におけるコーチングに関する内外の文献調査を行い、これまでに明らかにされてきた知見を整理すると共に、学校コーチングの理論的枠組みおよび方法論を整理した。その結果、(1) コーチングの考え方として、児童生徒の自律的な行動を導く支援的な関わりとしての位置づけがなされている点、(2) 児童生徒が直面する現実的な課題や問題の解決に向けた実践性が求められる点、(3) カウンセリングと異なり積極的に問題解決を志向する相互作用が重視される点、(4) 教師による教示的な関わりとは異なる支援的関わりが中心的な役割を果たす点、(5) 問いかける中で児童生徒の語りに傾聴する支援行動が求められる点、(6) 日常的な学校生活の中で展開し得る点、が研究を進める上で中心的なものとなる点が提示された。また、学校教育におけるコーチングに関する横断的研究に向けた準備態勢を整えるため、教科指導、生活指導、委員会活動、学級活動におけるコーチング実践の調査を実施した。具体的には、宮城県の小中高等学校、特別支援学校の教員約150 名を対象とした実態調査により、学校教育現場におけるコーチング実践の実態を明らかにした。その結果、学校教育現場でコーチングを進める上で課題となる以下の点が明らかとなった。まず第１に、個人への対応と集団（複数名、グループ、学級、学年、全校等）への対応の仕方である。コーチングのあり方が変わるのではないかといった意見が多く示された。また、コーチ

ングを実践するタイミングや頻度に関する戸惑いも多く示された。更に、コーチングの効果の評価や検証に関する疑問も出された。経験的にコーチングによる支援的関わりが児童生徒に大きな影響を示すのではないかといった実感はあるものの、実際にはどの程度効果が期待できるのか、検証が必要である点が指摘された。

また、東日本大震災の被災地の小中学校に勤務する教師186名を対象とした自由記述の質問紙調査、および 10 回の学校教育実践視察を行い、実際の現場における課題、問題状況の把握、および実践の記述を行った。その結果、コーチングをプログラムとして開発・実践する際、場面、課題の深度、児童生徒のもつ様々な資源、といった多層的な視点を想定した具体化が重要である点が示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①北村勝朗、山内武巳、時光一郎、東日本大震災被災者の心身の様態に関する質的分析、国際スポーツ心理学会国際セミナー、査読有、2015 年、61.

②尹得霞、北村勝朗．社会生活の中での日本語体験を通した学習観と学習方略の変容に関する質的分析．教育情報学研究 13．査読有、2014 年．25-33

③北村勝朗、永山貴洋．卓越したジュニアサッカー指導者を対象としたコーチング・メンタルモデルの質的分析．アジア環太平洋スポーツ心理学会発表論文集、2014 年、C01-1-7

④永山貴洋、北村勝朗、体育教師における比ゆ的な指導言語に関する信念．アジア環太平洋スポーツ心理学会発表論文集、2014 年、C01-1-11

⑤北村勝朗．プロフェッショナル・サッカー指導者を対象としたコーチング・メンタルモデルの質的分析．東北体育学研究 30(1)．査読有、2013 年．3-17．

⑥北村勝朗.「質の高い学び」に子どもを導く指導者の役割. ムジカノーヴァ 44(6). 音楽之友社．2013 年、12-15.

〔学会発表〕（計７件）

①北村勝朗、山内武巳、時光一郎、東日本大震災被災者の心身の様態に関する質的分析、国際スポーツ心理学会国際セミナー、2015 年、4 月 20 日、ローマ（イタリア）

②永山貴洋、北村勝朗．東日本大震災の被災児童は海洋キャンプ体験をどのように意味づけたのか．日本体育学会第 66 回大会. 2015 年 8 月 27 日. 国士舘大学（東京都）

③北村勝朗、中島徹．質的研究における思考過程の可視化と時間・空間的な地図化の試み：エコー・スマートペンを活用した質的データ収集実践．日本教育心理学会第 57 回総会．2015 年 8 月 28 日．新潟大学（朱鷺メッセ：新潟コンベンションセンター）（新潟市）

④永山貴洋、北村勝朗．小学校教員養成課程に在籍する大学生の体育授業に関する信念：教育実習未経験の大学生を対象とした質的分析．日本スポーツ心理学会第４２回大会．2015 年 11 月 23 日．九州共立大学（北九州市）

⑤北村勝朗、永山貴洋．卓越したジュニアサッカー指導者を対象としたコーチング・メンタルモデルの質的分析．アジア環太平洋スポーツ心理学会、2014 年 8 月 8 日、東京

⑥永山貴洋、北村勝朗、体育教師における比ゆ的な指導言語に関する信念．アジア環太平洋スポーツ心理学会、2014 年 8 月 8 日、東京

⑦北村勝朗、松浦佑一郎、鈴木大輝．エキスパート・スポーツ選手の熟達化体験の質的分析を通したコーチング熟達化モデルの構築．日本体育学会第 64 回大会．2013 年 8 月 30 日．立命館大学びわこ・くさつキャンパス（滋賀県草津市）

〔図書〕（計１件）

①北村勝朗、ＣＣＣメディアハウス、「300 人の達人研究からわかった上達の原則」2015、1-190 ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

北村　勝朗（KITAMURA KATSURO）
東北大学・大学院教育情報学研究部・教授
研究者番号：50195286

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
山内　武巳（YAMAUCHI TAKESHI）
石巻専修大学・人間学部・准教授
研究者番号：60296027